

大型板絵の制作技法研究

—元興寺蔵重要文化財《板絵智光曼荼羅》の想定復元模写を通して—

東京藝術大学大学院
美術研究科博士後期課程文化財保存学

1321932 張彬文

論文要旨

日本では奈良時代より、木の素地や漆をかけた木地に白土や黄土を地塗りとし、彩色を施した板絵が数多く製作されてきた。これら板絵は建造物の荘厳としてだけでなく、厨子扉絵や絵馬など様々な形式において多用された。板絵が様々な形式で見られる日本に対し、中国には現存する板絵の作例が極めて少なく、白土を地塗りした漆喰壁画が殆どである。このことから、板絵は日本美術の持つ特独な形式の一つとも言える。

大型板絵の作例として、奈良時代以前のものでは、薬師寺三重塔の天井裏板や栄山寺八角堂内陣装飾画のように建造物の木地に装飾彩色を施したものが挙げられる。平安時代の遺構では、木の素地に白土（黄土）を下塗りする技法が使用された醍醐寺五重塔壁画や室生寺金堂壁画、平等院鳳凰堂仏後壁などの例が見られる。そして鎌倉時代以後、法界寺阿弥陀堂柱絵や大報恩寺本堂来迎板壁仏画、称名寺弥勒来迎壁画などのように、漆地に土色地塗り彩色の技法が用いられるようになった。研究の対象としている《板絵智光曼荼羅》もその一例にあたる。

智光曼荼羅とは、奈良時代の高僧・智光が夢中で感得した極楽浄土を表したとされる曼荼羅図を指す。元興寺に伝存していた智光曼荼羅「正本」は法量1尺×1尺の小型方形の板絵であって、宝徳3年(1451年)の火災で焼失してしまった。智光曼荼羅は11世紀頃から盛んに転写され、現在元興寺以外にも各地に流布本・異相本など十種余りが伝世している。板絵本は智光曼荼羅の流布本のなかでは最も古く貴重な作品である。

研究対象作品《板絵智光曼荼羅》は元興寺の極楽坊本堂内陣、須弥壇上の厨子の後壁にはめ込まれていた約2メートル四方の大型板絵である。阿弥陀如来を中心とした聖衆と極楽浄土世界の様子を細密に描かれている。画面は上から虚空段、楼阁段、諸尊段、宝地段、宝池段、舞楽段の六場面で構成され、ほぼ左右対称の構図となっている。智光曼荼羅の要素と見られる阿弥陀如来の未敷蓮花合掌と二比丘を完備している。作品の表面は長年の礼拝による薫香や油などで覆われ、色彩は全面的に褐色に変化しており、肉眼による線描や図様の観察は難しい状態にある。昭和40年には大規模修理に伴う蛍光X線分析や赤外線撮影、X線撮影、顕微鏡観察などの科学調査が行われた。この結果、それまで殆ど認識できなかった線描や図様が明瞭になり、板絵の構造や材料の一部も明らかになったが、基底材の素材や彩色技法、欠失した図様など未解明の点が多数残った。科学調査により、板絵智光曼荼羅の画面上には油か何かを塗ったのではないかという推定がなされた。しかし、現状では油の製法や油自体を彩色に用いる方法などに関する技法的研究が乏しく、解明には至っていない。また巨大板絵や厨子扉絵の制作工程に関する先行研究において、地色から制作するにあたって重要となる基底材の製材方法についてはこれまで論じられてこなかった。

本研究では《板絵智光曼荼羅》の復元模写制作を通して、木材の選択から槍鉋作業の工程、漆層が下地に与える影響などに着目し、板絵制作の作業工程を明らかにする。《板絵智光曼荼羅》の制作に油の使用が示唆されている点に鑑み、本研究では、桐油の性質と使用方法の解明を試み、その知見を復元模写に応用した。また、赤外線写真、可視光写真、X線写真を用い、《板絵智光曼荼羅》に残存する線描を読み取る。多数の類似作品を参照し、欠失した図様の復元を行うとともに、本作品の造形様式の源流を探る。色カードの作成と組み合わせによる縹緗彩色サンプルを制作し、復元色彩案の検討を行う。最終的に、これらの知見に基づく復元模写の制作を通じ、板絵制作技法の体系を明らかにするとともに、《板絵智光曼荼羅》の本来の華麗な姿を再現した。

本論の構成は以下の通りである。

第一章では、智光曼荼羅に関する元興寺、智光法師を紹介し、智光曼荼羅の現存本を列挙し、その伝来と流布、構成について整理する。また本研究作品《板絵智光曼荼羅》の構造、内容などを述べる。

第二章では、板絵の先行研究を述べ、日本と中国に現存する板絵の情報を列挙する。また、《板絵智光曼荼羅》の修理記録とそれに伴う科学調査から明らかとなったこと、そして依然として残る疑問について列挙する。そして、熟覧調査において得られた新たな知見を示す。

第三章では、桐油彩色技法を明らかにするために、桐油の練りと塗布実験などを行い手板を作成し、その手板を基に蛍光 X 線分析・X 線写真撮影・赤外線撮影・紫外線撮影・顕微鏡調査を行い、調査結果を分析する。また東京藝術大学が所蔵する板絵に対して行った科学調査について述べる。

第四章では、基底材の選定、製材、槍鉋作業、漆作業といった初期工程から、読み取った欠損図像の復元、さらに下地制作、転写、骨描き、彩色、截金、そして描起しに至るまでの一連の記録に基づき、《板絵智光曼荼羅》の想定復元制作について論述する。

終章では、第一章から第四章までの内容を振り返り、大型板絵の成立と美術史における位置づけを述べて結論とする。